

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：24506

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12833

研究課題名（和文）『カテゴリー論』の問題群を通じた古代末期哲学における知性論の再検討

研究課題名（英文）Study on Intellect and the Categories of Being in Late Antiquity

研究代表者

西村 洋平（Nishimura, Yohei）

兵庫県立大学・環境人間学部・准教授

研究者番号：90723916

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：古代末期の知性論の中心となる「可能知性」や「能動知性」という概念によれば、人間は知性認識活動を可能的に有しており、世界は認識可能な対象として存在する。そうした対象や人間の認識が可能的な状態から実現に向かうことを可能にする原理として、能動知性がある。

本研究は、こうした目的論的な認識のあり方や世界観をプロティノスはアリストテレス主義と共有することを明らかにした。ただしプロティノスにとって、可感的な世界のみを説明できるアリストテレス主義的なカテゴリーは不十分であり、プラトン由来の知性的なカテゴリー「存在・動・静・同・異」による知性論の展開が必要であったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代ギリシアから、中世・近世・現代に至るまでの哲学史をたどるときに欠かせないテーマの一つに「知性」（nous）がある。その知性論をめぐっては、アリストテレス由来とされる「能動知性」や「可能知性」を中心に研究がなされてきた。本研究の成果に基づけば、プロティノス以降のプラトン主義は、アリストテレス主義の存在論の否定（あるいは批判的受容）のもとで、そうした知性論を受容している。アリストテレス知性論の受容史は、プラトン主義とアリストテレス主義の存在論的な対立のもとで理解されるべきだということ、今後の哲学史研究に新たな視座を提示した点に、本研究の学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）： According to the concepts of "potential intellect" and "active intellect," which are central to the theory of intellect in Late Antiquity, human beings have the potential for intellectual activities, and the world exists as a potential object of such intellectual activities. The active intellect serves as the principle that enables the actualization of these objects and the potential state of human intellection.

This project has revealed that Plotinus shares this teleological view of intellection and worldview with Aristotelianism. However, for Plotinus, the Aristotelian categories that could only explain the sensible world were insufficient. It was necessary to develop a theory of intellect using the Platonic categories of "being, motion, rest, sameness, and difference."

研究分野：西洋古代哲学史

キーワード：新プラトン主義 知性論 カテゴリー論 認識論

1. 研究開始当初の背景

アリストテレス『魂について』第3巻第5章で知性について書かれた16行の記述が、神学や天体論、認識論や存在論にわたって、哲学史に影響を及ぼし続けたことは知られている。その影響史を語るうえで欠かせないのがアリストテレス解釈者アレクサンドロス(2-3世紀頃)と、テミスティオス(4世紀)や後期新プラトン主義者たち(4-6世紀)による『魂について』注解・パラフレーズである。その一方で、プロティノス(3世紀)やプロクロス(5世紀)といった新プラトン主義哲学者は、アリストテレス知性論の影響が指摘されるものの、いわゆる能動知性や可能知性といった問題群に全く関心を示していない。それはアリストテレス的知性論が自らのプラトン主義と相容れないことを強く意識していたからだと考えられる。

アリストテレス注釈者たちが可能知性や能動知性という区分を持ち出し、どのような議論を展開したのかについては多くの研究がある。しかし、同じ知性を論じる場合でもプラトン主義者たち(プロティノス、プロクロス)は、こうした伝統的な知性論の問題にほとんど言及しない。そして、この沈黙が何を意味するのかを、これまでの研究は等閑に付してきた。これが研究開始当初の背景であった。

2. 研究の目的

そこで本研究の目的は、上述のような背景から出てくる二つの大きな問いに取り組むことであった。すなわち、プロティノスに着目し、「可能知性や能動知性といったアリストテレスの問題が扱われなかった理由は何か、それが持つ反プラトン主義的な要素とは一体何か」(問1)を明らかにすることと、「知性論と『カテゴリー論』の存在論はどのような関係にあるのか」(問2)という問いに取り組むことである。

「知性」(*nous*)とは、対象となる存在・出来事を、その原因に基づいて真に認識している状態あるいはその認識そのもののことを意味する。したがって、知性について論じることは、認識の対象となる世界がそもそもどのようなあり方をしているのか(存在論) そうした世界のあり方に基づきつつ、どのような方法によって知識を獲得するのか(認識論)という問いに答えることである。可能知性や能動知性をめぐる議論(問1)は、どのように知性認識が実現するのかという認識論に関わり、『カテゴリー論』をめぐる議論(問2)は世界や知性認識対象のあり方をめぐる存在論に関わる。本研究の目的は、アリストテレス注釈者たちに集中しがちな知性論研究を、プラトンに基づいた知性論を示すことで十全なものにすることである。

3. 研究の方法

上述の目的を達成するため、本研究は、まずペリパトス派のアレクサンドロスとテミスティオスの知性論に取り組む。知性論に関しては、両者によるアリストテレス『魂について』の注釈・パラフレーズだけでなく、新プラトン主義注釈者たちによる証言などを扱う。アレクサンドロスについては『問題集』(*Quaestiones*)の関連する章を読解・分析する。『カテゴリー論』に関しては、とくに第5章における本質存在の規定(基体のうちになく、それについて語られない)をめぐる古代末期の論争を取り上げる。個物や類・種といった普遍、自体性と付帯性の区別、本質的特性や形相の存在論的身分といった、知識獲得に関わるテーマを論じる。

プロティノスについては、アリストテレス主義のカテゴリー論・存在論に対する批判の書第42-44論考「存在の諸類について第1-3篇」(VI、1-3)を中心に扱うが、その他『エンネアデス』全体で関連する箇所を検討する。

4. 研究成果

2020年度は、問題の出発点となる古代末期のペリパトス派の議論を取り上げ、「能動知性」の役割を検討した。能動知性を神とするアレクサンドロスの見解を、*De intellectu*、*De anima*、*Quaestiones* といった著作を中心に取り上げ、その認識論・存在論的役割を調べた。また、2020年に刊行された R. Chiaradonna and M. Rashed による *Boethos De Sidon: Exegete D'Aristote et Philosophe* を読み、アレクサンドロス以前のペリパトス派による素材・形相論や実体論についての知見を深めた。とくに形相の把握としての知性認識や、「普遍」の存在論的身分を中心に引き上げて考察した。個物が普遍に先行するとするペリパトス派の立場について、普遍は個物の集合(特定の述語づけの外延)だという意味でとるポエトスら初期ペリパトス派と、個物を定義づける本質的特徴(ある個物を定義する概念などの内包)とするアレクサンドロスの立場を対比的に検討し、両者の立場を整理した。古代末期における『カテゴリー論』をめぐる論争の端緒ともな

ったポエトスの見解の精査が、2020 年度の大きな成果であった。とくに、ポエトスと対立してのちにペリパトス派的な知性論を展開するアレクサンドロスの議論の背景が明らかとなったことで、アレクサンドロス自身の立場を明確に理解することが可能となった。

2021 年度は、『カテゴリー論』やその諸解釈から派生した諸概念が、知性論とどのように接続しているのかを研究した。具体的には、ペリパトス派アレクサンドロスの「知性」(あるいは神)が、素材と形相からなる生成消滅する世界の種的永続性にどのように関わっているのかという摂理の問題を取り上げた(アリストテレス『形而上学』第 12 巻の影響史研究)。そのうえで、アレクサンドロスが『カテゴリー論』の存在論と『形而上学』の知性論をどのように接続しているのか調査した。それと並行して、新プラトン主義が摂理論をどのように展開し、そこにおける知性の目的論的な役割について研究を行った。

また『カテゴリー論』への導入である『エイサゴゲー』や『カテゴリー論注解』、プロティノスによるカテゴリー論批判の書「存在の諸類について」といった文献の精読を行った。影響史をたどるといふ観点から、中世のポエティウスの『エイサゴゲー』注解を取り上げ、その立場が新プラトン主義的なものかどうかについても調査した。

プロティノスについては、「存在の諸類について 第 1 篇」を読解し、ペリパトス派とストア派のカテゴリー批判について精査した。ストア派批判においてプロティノスは、ストア派的な物体主義では可能・現実という様相的な側面が説明できないと論難している。可能的・現実的なあり方については、ペリパトス派的な世界観を受容していることが明らかとなった。

また年度の最後にはプロティノス・セミナーを開催し、専門家たちとプロティノスの第 30 論考「自然・観想・一者について」(III, 8)を精読し、可感的世界の原理である「自然」についての理解を深めた。

これまでの研究から、知性(そして知性が付与する形相)は、世界のあらゆる存在にとっての終極・目的であることが明らかとなったが、目的因の理解に新プラトン主義とアリストテレス主義には大きな隔たりがある。そこで 2022 年度は新プラトン主義の目的的理解と、主にアレクサンドロスの目的論を研究対象とした。

アレクサンドロスの目的論については世界的にも研究が少ないため、専門家である Marwan Rashed 教授(Centre Leon Robin: CNRS-Universite Paris-Sorbonne)のもとで在外研究を行った。Rashed 教授からは、参照すべき関連テキストの示唆や、古代末期からイスラームにおけるアレクサンドロスの受容と批判に関する知見を受けた。アレクサンドロスは、「より優れたものが原因となる」という、西洋哲学史において主流となる新プラトン主義的な原因の考えを持ちながらも、人間知性の発達や能動知性を論じる文脈ではそうした原理ではなく目的論に訴えている。「人はなぜ知ること欲するのか」という問いに取り組む『形而上学』第 1 巻への注釈と並行して、プロティノスや後期新プラトン主義者たちが同じ問題にどのように取り組んだのかを明らかにした。

プロティノスについては、「存在の諸類について 第 2 篇」を読解した。アリストテレス的なカテゴリーに代わるものとして、プラトン『ソピステス』(248-258)解釈から出てくる五つの類(存在・動・静・同・異)を取り上げる箇所(第 8 章)を中心に分析した。これらの類を通してイデア的世界の多様性を説明する際に「可能的」「現実的・能動的」という概念が用いられるが(第 20-21 章)、アリストテレス的な概念とは大きく異なっていることを明らかにした。

また年度の最後にはプロティノス・セミナーを開催し、専門家たちとプロティノスの第 51 論考「悪とは何か、そしてどこから生ずるのか」(I, 8)を精読した。世界が認識の対象として開かれている一方で、悪のような存在は認識も存在も求められていないものである。そうした悪をプロティノスはどのように説明するのか明らかにした。

2023 年度は研究のまとめとして、新プラトン主義(主にプロティノス)とアリストテレス主義(アレクサンドロス)の違いと類似点について考察を深めた。また、この問題に対する知見を広げるため、アラビア哲学の形而上学を専門とする Amos Bertolacci 教授を招聘し、アレクサンドロスやプロティノス的思考が、中世イスラームの哲学者たち(おもにアヴィセンナやアヴェロエス)に見ることができるのか、その場合の内実について、意見交換を行った。

プロティノスについては「存在の諸類について 第 3 篇」の読解を行い、プロティノスによるアリストテレス的なカテゴリー批判と、「存在・量・性質・関係・運動」という五つの可感的カテゴリーへの改変の議論について理解を深めた。可感的存在を性質の束であるとしつつも、ロゴスによって把握可能なものとして理解する箇所(第 15 章)を中心的に分析することで、根本的な原理を「一」としつつ、知性的世界と感性的世界を統合的に説明しようとするプロティノスの試みが明らかとなった。

年度の最後にはプロティノス・セミナーを開催し、専門家たちとプロティノスの第 42 論考「存在の諸類について 第 1 篇」(VI, 1)と第 44 論考「存在の諸類について 第 3 篇」(VI, 3)の運動のカテゴリーに関する箇所を精読した。プロティノスがカテゴリーの一つとして捉える「動・運動」は、アリストテレスのカテゴリーにはないものである。プロティノスは、アリストテレスの *energeia* と *kinesis* の区別を批判することで、生成消滅する可変的なあり方を感性的世界の特徴として捉えつつも、それを知性的な原理である「動」や「異」によって説明可能なものとして

捉えていることが明らかとなった。

本研究の最終的な結論を簡潔に述べるならば、アリストテレス主義の「能動知性」が果たす根本的な役割は、プロティノスにとっては知性ではなく一者という最高原理であった、というものである。

「存在の諸類について」やその他の論考でプロティノスは、知性的なものや可感的なものに共通するのは「存在」ではなく「一」であるとしている。他方で存在は多様なものであり、知性的な存在と可感的な存在は同音意義的（定義が全く異なるもの）ですらあり、後者は存在とすら語られない場合もある。とはいえ、世界は知性に由来する原理（自然）によって存在しており、人間にとって認識される対象である（ペリパトス主義的な目的論的世界観や知性論の受容）。プロティノスにとって、知性的な存在と可感的な存在を結びつけるものが、「存在のカテゴリー」であった。知性的な存在の一員である魂は、「存在・動・静・同・異」という枠組みで認識が可能であると同時に、万有の魂と自然はそうした枠組みで可感的世界を生み出している。つまり、可感的世界は「存在・量・性質・関係・運動」に分類され、そのように認識される。

ペリパトス派（とりわけアレクサンドロス）の能動知性は、プロティノスにとって、イデア的世界と可感的世界をこのように統合的に理解可能にするものではなかった。これが、プロティノスが知性の仕組みを能動・可能というアリストテレス的概念で説明することに代わり、プラトンのカテゴリー（類）を用いて知性を説明した理由である。そして、このような統合的な理解を貫いているのが、五つのプラトンのカテゴリー（類）を超越しつつもその原理となる一者であった。

他方で、本研究を通して、知性などの存在論的な身分についての相違はあるものの、能動知性ないし一者を究極的な認識の目的とし、この世界がそのような究極的な認識に向けて開かれているものである、といった目的論的な世界観、認識論の基本構造の理解については、新プラトン主義もアリストテレス主義も共通して有していることが判明した。この点は、アラビア哲学に両方の哲学が流入・受容されることと関連していることが確認された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 西村洋平	4. 巻 64
2. 論文標題 哲学入門と翻訳 ポエティウスの『エイサゴージェ』訳注をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中世思想研究	6. 最初と最後の頁 105-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村洋平	4. 巻 20
2. 論文標題 神は存在もしなければ創造もしないー神・存在・創造をめぐる新プラトン主義の論理ー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新プラトン主義研究	6. 最初と最後の頁 5-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村洋平	4. 巻 52
2. 論文標題 プロティノスの知性主義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 古代哲学研究（METHODOS）	6. 最初と最後の頁 25-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西村洋平
2. 発表標題 人間はなぜ知ることを欲するのか 古代末期の知性論
3. 学会等名 古代哲学研究ネットワーク第1回
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西村洋平
2. 発表標題 哲学入門と翻訳－ポエティウスの『エイサゴーゲー』と『カテゴリー論』訳註をめぐって
3. 学会等名 中世哲学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西村洋平
2. 発表標題 第30論考「自然・観想・一者について」(III, 8) 第8章
3. 学会等名 プロティノス・セミナー
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西村洋平
2. 発表標題 『純粹善について』の「統括」(tadbir)と古代末期の摂理論
3. 学会等名 ギリシア・アラビア・ラテン哲学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西村洋平
2. 発表標題 神に似るとはいかなることか - - プロクロスの倫理思想
3. 学会等名 シンポジウム「プロクロスから東方キリスト教へ」(科研費「ギリシア・アラビア・ラテンにおける新プラトン主義思想の伝播と発展」主催)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------